

## 想いを受け継ぐ

井上 晃宏（教育・昭和 59 年卒）

我が家には約 30a（3 反）程の田がある。この田での米作りが、私の退職後の生きがいとなりつつある。

まず、我が家の米作りの経緯を紹介しておく。我が家は、私の両親の代で井上家の本家から分家した新家なのだ。分家した当初は、本家から譲り受けた田は僅かで、両親が少しずつ買って増やしいったと聞いたことがある。そして、後々のためにと考えた父は、小さかった田を統合して一つの広い田にしたり、田への水張りをし易くするために水の取り込み口を整備したりしたことも、まだ自分事とっていなかった私は、他人事のような出来事としてしか考えていなかった。

教員在職中の大半には、米作りはほぼ父任せで、田植えと稲刈りの時にだけ手伝ってはいたものの、水の入れ方さえも知らなかったほどだった。それが今から 10 年ほど前の、父が高齢になり衰えが顕著となったことと、少しだけだが痴呆が気になり出した時が、私が主に耕作するきっかけとなったのである。はじめのうちは、父に言われるままにやっていたのだが、父の年齢が 90 に近づき、それと相俟って痴呆が進んだことにより施設への入所も考えだしたことから、もう父に頼ることができなくなってからは、米作りの全てを自分の手で行なうようになった。

米作りが、自分事となってくると、父が後々のためにとの思いで築き、残してくれたことが、ひしひしと伝わってきた。まず 1 つは、うちの田の横の田が売りに出されると、遠くの田を手放しそこを買って隣接した所に田を集めたこと。2 つ目は、田を拡張して広い一つの田にして耕運し易くしていたこと、それから、田の畔を全てコンクリート畔にして水持ちをよくしていたこと、さらに、1 カ所堰をすればすべての田に一度に水が入るようにしてくれていたこと等、父が後を継ぐ私のことを想って次々と手を入れてくれていたことを心の底からありがたいと感じた。今は、引き継いだ田を私の息子に手伝ってもらいながら米作りに精を出している。米の値段が高騰し、県産の銘柄米の新米は高値で買ってもらえるようになると同時に、家族や孫たちから、「ほんまに美味しい」と褒められるので、やりがいを感じながら取り組んでいる。

今年の年初めに父が他界した。葬儀の席で、これまで伝えきれていなかったことを伝えた「後を継ぐ私のことを考え、作り易くしてくれて本当にありがとう。しっかり受け継ぐので安心してください。」と。